

心動くままに

「甘え」の論理について

「甘え」という論理は繰り返しでてきている。私が吃音者の問題を差別の問題である、と主張したときにも、「社会に対して甘えている」と批判されたことさえある。「甘え」ということには、「社会」と「個人」ということのとらえかたの問題とか、人間観・世界観の問題がよこたわっているのだが、「甘え」ということで指摘される具体的問題について述べればそれは明らかになる。吃音者の一部において、引っ込み思案だった吃音者が前向きに生き始めた時、他者のことを考えないでしゃべりまくる人がいる。それが過渡的なこととしてあるかもしれないが、そのままそのような態度を固定化してしまう人もいる。それは一つの吃音の「克服」の仕方なのである。他者の自分が吃った時の反応にたいして面の皮を厚くするということで乗り越えようとした。そのことの延長として他者のことを考えないという姿勢がでてきているのではないだろうか。だから問題は自分が傷みを持ってきた、持っているというところで、他者の傷みをとらえかえすという姿勢、他者のことを思うという姿勢を持つということができるのか、という問題なのではないだろうか。

要するに被差別の状況で自分の殻に閉じこもり自分のことしか考えられなかった状態から、他者のことを考えうるように変わりうるか、吃音者「個人」の問題を吃音者総体（普遍）の問題として、更に他者（他の被差別者）の傷みをとらえうるようになるのか、という問題ではないだろうか。

即ち、対自的に自らの痛みをとらえ返すことが問題になる。それが他者の痛みをとらえ返すことにつながるのではないか

「甘え」の論理で最も明確になるのは「犯罪者」の問題である。「犯罪者」は社会に甘えているという論理がある。だがそもそも「犯罪者」とは社会から傷付けられた人ではないだろうか、それにたいして即時（即自）的に反発したのが「犯罪」ではないだろうか。平岡正明は「すべての犯罪は革命的である」というテーゼを掲げた。そのような論理はレイプが「革命的なのか」と反論すれば明らかになる。即ち、「犯罪」には被差別者の差別の転化という問題があるからである。そこに差別の重層構造がある。

確かに自分の殻を作ってきた人に特有の態度が色々みられる、それを「甘え」とか、「常識—社会性がない」と表現するとき、それは何故「殻」をつくったのか、何故社会性がないのか、ということを捨象している。私はそれを自分のことしか考えられない状態としてとらえている。そして厚かましく生きようとする時、この社会のよくみられる傾向（実は「本質」であると私は指摘するが）、人のことなど気にしてられないと、なるのではないだろうか。

問題を吃音者の問題に戻そう。吃音者が、しゃべりまくっている時、そこに私はその人の抑圧されてきた影をみることができる。「ここならしゃべれる、しゃべりたい」という意識がある、対他関係で「何を語るべきか」という所までに至っていないのである。そしてそれが時にはここなら劣等観を持たなくて済む、ということから時には優越観を持てる

という態度を示すことがある。それらを「甘え」とかで片付けて済むのであろうか。

それらに対して私は、吃音者の問題を吃音者総体の問題としてとらえることによりそのことを乗り越えようと提起したい。そのとき他者のことを考えうる、他者の痛みをとらえるのではないのだろうか。「色々」な問題を「社会的常識」一建前を身につけることで解決するのではなく、そのような他者の痛みをとらえかえす姿勢一本音の部分で獲得することによって解決すべきではないだろうか。

「甘え」の論理にはそのような視点が欠落している。その論理は差別者の論理であり、それに呼応（屈服）した被差別者の（無自覚的）論理として現れている。

（S）

